

佐賀新聞 2009(平成21)年7月29日(水) 県内文化欄 文化時評

(第三種郵便物認可)

県内文化

美術

野中 耕介

黒田清輝とともに

史学者久米邦武一譲り（こ）佐賀で美術教育で、教育者であり洋画家であった（だろ）をき者と作家、二つの道を歩んできた金子剛の絵画陶を受けている。「描きた行政家として活躍した行政家として活躍し、美術の啓蒙に生涯を捧げた。」

「白馬会」を結成し、久米が絵筆を折った理由、その真意について、残念ながら藤について考えていた。金子もまた「おそ郎（1866-193）が、さまざま要因とらる久米もそうである4）は、1900（明）自身思いが複雑に絡たように一その両立のう。

治33）年

パリ万博への出品

教育と創作 両立の苦闘

来場され た方々が金子の展覧に

を最後に、洋画を描くみ合っの決断だった問題について苦闘を続けたとすれば、それは作

に34歳、留学の成果で決断の裏側にはいい知れぬ心の葛藤があったけ、「独りの絵描きと明るさ、そしてふるさとを浴び、画家としてさ に違いない。「自分はして、七十にして新た とへの温かいまなざしらなる飛躍を期待され 画家たるべきか、教育 に出発」したいとい と同時に、葛藤しなが た、ま（ま）これからと 者（あるいは学者）た う金子の主張は、そらも絵筆をとり続けて いた時期であるにもか べきか「……もしか の苦闘の証である きた者のみを知る、あ かわらずである。絵筆 したらこんな風に、久 ように私には思われ る。」

を折って以降、久米は 米は「二つの道」の両 理論家としての資質 立に密かに悩んだのか 金子は佐賀大学教育 学部の特設美術科に だろ）か。（県立美術館学芸員）

文化時評 2009